

【特集・韓国】

韓国における 出生時の習慣

現代中国学部
藤森 猛

2001年から2002年にかけて、私の弟（長野県在住）家内の妹（ソウル市在住）および私の所（愛知県）で、あいついで子供が出生した。生まれも育ちもソウル市である家内（李周遠：イ・ジウウォン）の出産・育児アドバイスを参照して、韓国の出生時の代表的な習慣とお祝いごとを紹介してみたい。

「미역국」(ワカメスープ)

韓国では出産後の妊婦はワカメスープ(미역국)を飲みつづける習慣がある。スープには、母乳や血液の成分として必要なカルシウム・鉄分・ビタミン・たんぱく質などが豊富に含まれ、母体の回復期(産褥期)には理想的な食べ物とされ、出産直後から毎日の食事で主要なメニューとして飲む(食べる)習慣がある。

材料は、干したワカメ(미역)、牛肉(쇠고기)、ニンニク(마늘)をベースとし、これにゴマ油(참기름)、塩(소금)、醤油(간장)などの調味料で味付けをしていく。

作り方としては、まず干しワカメを20～30分間水につけてもどし、3～5センチくらいの適当な大きさに切る。韓国では金大中(김대중)大統領の出身地でもある全羅道(전라도)でとれたワカ

メが有名であるが、市販されている乾燥ワカメを用いてもかまわない。干しワカメは水に戻すと膨大な量になり、日本式のワカメスープであれば20～30グラムあればスープ2～3回分の分量になるが、韓国式のワカメスープはこれでもか、これでもかといった具合にワカメを器に溢れんばかりに入れる。韓国ではスープは「飲む」(마시다)ではなく「食べる」(먹다)であることを実感する。また牛肉はかたまりの肉を2～3センチに細く切り、これにゴマ油・塩・醤油あるいは好みで胡椒(참깨)をかけ、しっかりとあえて下準備は完了する。韓国ではゴマ油・塩・醤油は、唐辛子からつくくるコッチュジャン(고추장)とともに調味料のベースとなっている。

次に鍋を火にかけて、ゴマ油をひき、牛肉を炒め、焦げ目が少しついたところでワカメと細かく切ったニンニクを入れる。約1分ほどして白く濁った汁がでてきたら、お椀で5杯分ほどの水を入れる。煮立つまでは強火にし、その後20分ほど中火で煮て、最後に醤油などを少し加えて、風味のよいワカメスープができあがる。

「첫돌」(最初の誕生日)

日本では、出生後、1ヶ月くらいでお宮参りをし、出生後100日から120日の時、親戚や親しい友人などを家に招いて食事会を催し、赤ちゃんの食い初め(箸立、箸初め、ももか)を行う。韓国では百日(백일)の習慣は残されているものの、現在では、一般に満1歳の誕生日(돌)を盛大に祝う。

最初の誕生日のお祝いでは、様々な食べ物が準備され、お餅(돌떡)などの菓子類、スイカ(수박)、メロン(메론)といった果物類を盛大に飾って、韓国の服(한복)を身に付けた赤ちゃんの記念写

真を撮る。また赤ちゃんにエンピツ(연필)、糸(실)、お金(돈)など準備して、いくつかの品から一つを選ばせる。例えば赤ちゃんがエンピツを選んだら、将来は学者になり、糸を選んだら長生きをし、お金を選んだら金持ちになるというような占いを行うのが習慣となっている。このような1歳のお祝いは、最近ではホテルなどを借りて、100人程度の客を招いて、豪華盛大に行うのが普通になってきている。ソウルに住む家内の妹夫婦もその慣習に従った。

韓国においては、近年、少子化の傾向にあり、子供の数は日本と同様に1人ないしは2人となっており、また一方で伝統的に男子による相続制度の観念が残されている。よって、一人っ子として生まれた男児には、その一家の命運がかかってくるため、子供のお祝い事にはたいへんな準備と労力が費やされることになる。大切に育てられた男子は韓国語で「玉童子」(옥동자)と呼ばれる。なお子供の数が1人である家庭は、男子の出生を望むケースが多くなり、それを人為的に調整している面があるために、現在新生児における男子の割合が非常に高くなっており、社会的な問題となっている。(韓国における伝統的な出産・相続については、韓国映画『シバジ(씨받이)』[86年、イム・グォンテク(林權澤)監督]がその問題点を指摘しているので、観賞を勧めたい)

果たして、私の家にもソウルの家内の実家から大量の全羅道ワカメや高麗人参(고려인삼)が常時送られてくることになった。こうして家内が産院から退院したその日から、朝食でワカメスープを作るのが私の一日の日課となった。韓国では、ワカメスープを毎年の誕生日(생일)でも飲む習慣があり、スープを作ってくれた母(어머니)に出生時の感謝をすることになる。我が家では、ワカメスープを作っているのは父親である私であるので、子供に感謝されるのは母親となるかどうかは少し疑問である。

韓国の「姓名」と 日本の「氏名」について

法学部
常石 希望

(一)

「姓名」とは「なまえ」あるいは「人名」のことである。日本では「氏名」あるいはその一部を「苗字」とも言う。英語なら「Name」と言えば済むのに、上のごとく「なまえ」「人名」「姓名」「氏名」「苗字」などと多様な言葉を持つのが東洋の言語の妙である。

これらのうち歴史的に見て重要なのは「姓名」と「氏名」である。韓国には「姓名」という言語およびその文化は存在するが、「氏名」という言語と文化は日本にしかない。実はこの差が決定的な差である。

古来、中国や朝鮮半島では「姓不変」「同姓不婚」「異姓不養」という三者が「姓」に対する三大鉄則、従ってより本質的には「家族制度」に関する三大鉄則として考えられて来た。朝鮮半島では、朝鮮王朝時代を治めた大法典『経国大典』にこの思想がよく表されていて興味深い。

上記三大鉄則のうちまず「姓不変」というのは、男も女も生涯を通して自らの姓を変えないこと、特に女性は結婚しても姓を変えない点は日本と対照をなす。第二に「同姓不婚」とは文字通り同じ姓の者どうしは結婚できないこと。第三の「異姓不養」とは、養子(幼ない子供)は同姓の一族の中から取り、日本的な婿養子制度などは考えることもできないのである。いずれにしろ中国や朝鮮が鉄則として守り続けて来た「姓と家族制」に対し、日本だけが全く異なった孤立的態度を維持して来たことがわかる。